

<対象及び方法>

東京都立松沢病院に通院、入院中の覚せい剤乱用患者及び、年齢、両親のSES (Socio-economic state)、被験者自身のIQなどをマッチさせた健常対照者のうち、書面で研究参加の意思が確認できた者、各20名を対象にした。Philipsの1.5テスラMRI機器で撮像した1mm等方性ボクセルの3次元T1強調画像を、画像解析ソフト3D-slicerを用いて解析。用手的解析で、海馬及び扁桃体を定義し、灰白質体積を測定した。統計解析の際には、個々の頭蓋内容積による体積の相対化を行った。患者群では、SANS (Scale for the Assessment of Negative Symptoms)、SAPS(SA-Positive Symptoms)、BPRS (Brief Psychiatric Rating Scale) などによる精神症状及び依存度の評価、詳細な病歴と乱用歴の聴取を行った。

<結果>

健常者群に比較して、覚せい剤精神病患者群の両側海馬、扁桃体で灰白質の体積減少が有意に見られた。また、体積減少は海馬よりも扁桃体において顕著に見られた。健常者群に比べ、患者群の総灰白質、総白質、及び頭蓋内体積は標準脳よりも有意に小さかったが、頭蓋内体積補正後も、患者群の内側側頭構造における灰白質は健常群に比べ、統計学的に有意に体積減少が見られた。

<考察>

海馬における体積減少は、外因性精神病である覚せい剤精神病と内因性精神病である統合失調症に共通するが、扁桃体における体積減少は覚せい剤精神病に特異的であると思われる。